

工化時報

1959.10

2

巻 頭 言

工 藤 憲 資

勿論情勢は現在とは大いにちがう。私が、朝鮮・満洲・北支・蒙疆を訪れたのは、所謂大東亜戦争勃発以前で、帝国はなやかなりし時代の事であつたから。これら諸地域の旅行中、ほとんどすべての都市に、本学出身の方々が活躍されている様を知つて、ひどく感心もし、亦驚きもした。未だ一人の卒業生も出した事のない創立時代の我が教室、工学部二年生が、やつと出来た許りの頃だつたので、校支諸賢に敬意を払う時間もなく、其の必要も少なかつたので、一々の挨拶はさしひかえてしまつた。しかし当時私は、20年後の我教室の発展の様子をあれこれ想像して、深い思ひに沈んだ事があつた。あれから丁度20年の歳月は文字通り経過している。此の間、旧制12回、新制8回の工学部卒業生を世に送り、総数5,000名に及ぶと聞く。専門部、高等工学校の校友諸君を含めれば幾許になるのであろうか。誠に素晴らしき勢力と云はなければなるまい。

近時実社会に於て中堅幹部として活躍される教室出身の校友諸君が、しばしば後輩の指導や、就職の斡旋に尽力される実状を拝見し、20年昔の夢が実現された喜びをひそかに味はつている。

大学教育の何ものにもかえ難い収穫は、世の指導者たるべき人物を、友人として手近かにもち得る事にあると、私は考えたい。四年間に得られる学識、経験に到つては極めて些々たるものであるのみならず、意志さえあれば何処に在つても獲得出来る筈である。我々が四ヶ年の学生生活中、交友をなおざりにする事があるとすれば、それこそ、悔を千載に残すものとなるであろう。我々は友人によつて常に啓発され、援助され、協力をうけるのであつて、単にその圈内にあることによつてすら、有形、無形、莫大な利得をうける筈である。友人の力、これは、我々の仕事に対しては恐るべきポテンシャル・エネルギーとなることを疑はない。

すべてが、チームワークによつて成される今日の社会に於ては、単離された秀才の能力はもはや一顧の価値もないものであろう。結集された凡才の綜合力には到底大刀打ち出来る筈がないのである。

〔 委員会報告 〕

〔 1 〕 庶務委員会報告

6月29日 学生評議員にて講演会開催を発案。

これより一週間講演会に関するアンケートを実施
集計する。

7月 2日 短期学へ当会の趣旨説明及び会費徴収に行く。

4日 全学生評議員が会合し講演会開催の計画を作製決
定する。

25日 工科校友会代議員を評議員中より選出すること
にし、内定者に通知する。

9月19日 学内役員会を開き、学生役員発案の会則一部改正
案を審議する。なお会則改正のため臨時会則審議
会を設ける。(出席者21名)

10月10日 役員会を開催し、次の事項を審議決定する。

- ・ 先の審議会より提出の会則修正案。
- ・ 総会スケジュール及び実行委員選出。
- ・ 各委員会報告。(出席者16名)

〔 2 〕 名簿委員会報告

工化会職域別会員名簿の発行は今年1月に開かれた役員会で
決定され、名簿編集委員は専心これに当つてきたが、やつと完
成されるに到つた。この間多くの方々により激励の言葉をいた
だいたり又大昭和製紙(株)の斎藤喜久蔵氏より莫大な用紙を寄贈
して戴いたり作業員が名簿発行の職旨を解し夏期休暇を返上し
深夜迄編集にあたつて下さつたり、名簿の完成は一重に会員の
絶大な支援のおかげと委員一同心から感謝する次第である。た
だ予定より約2ヶ月発行が遅れたことにつき編集委員の不手際
を重々お詫び申し上げる。職域別名簿発行の意義については名
簿の巻頭言に中原会長がくわしく述べておられるので再びこ
こではふれない。願わくはこの名簿を大いに利用し会員の親密化
に役立てて欲しいものである。名簿の統計欄には出身校、業種
別統計をのせたが頁数の都合上正会員現住所及び学生会員出身
高校の都道府県別統計は削除したのでこの紙面を利用し参考ま
でに記すことにする。

	正会員住所 (%)	学生会員出身高校 (%)
北海道地方	1.17	0.87
東北地方	2.83	9.54
関東地方	76.68 ※	65.13
中部地方	8.18	12.62
近畿地方	5.67	2.69
中国地方	2.64	3.56
四国地方	0.44	2.12
九州地方	2.29	3.37
沖 縄	0.06	0.10

※印 関東地方の67.5%は東京 18.2%は神奈川県である。

完成した名簿を手にするときいかに不完全な名簿であるかを再確認する思いである。しかしそれ程卒業生相互の連絡が不十分であるというのが工化会会員の現状なのである。

現状では調査票を発送しても発送数の30%しか回答がなく、10%は返送され残りは未回答のままである。総額60万円を突破するこの大事業も編集費皆無でふみ切り学生会員の予約金でかろうじて作業を行ってきただけに通信費とて全く血の涙の思いであつた。

通信費を多くかける程完全な名簿が出来上る筈であるが現状の工化会ではそうとはいえないのは甚だ淋しい限りである。工化会の発足を御存知ない方も多い現状故いたし方のないことである。今後はこの不完全な名簿をより完全とならしめる様会員各位が御不満や御希望あるいは訂正資料等を本会名簿編集委員会宛直接に御連絡いただくことをお願いする。

上野敦行(新学2部2回卒)

[3] 会計報告

本年度の決算は、まだ総会で承認されておられませんので、報告は次号に行わさせていただきます。

会計よりのお願い

この一年間まだ設立当初故会の趣旨が会員特に正会員の皆様全般に充分徹底しなかつた嫌いがあり、積極的に会費徴収に当れず、会の運営が資金不足で妨げられていることを非常に残念に思い、本年は先に各評議員の方々をお願いいたしました、工化時報第一号と共に、総会・懇親会の開催、時報第二号・名簿発行を通じて会への関心をより一層深めていただき、二年目を迎えた工化会が大きく飛躍するべく、種々の計画事業が円滑に進行し、尚一層発展します様、会費納入に皆様の御賛同御協力をお願い申し上げます。

[4] 編集委員会報告

昨年四月、評議員会の議決により、工化会の発足を知らせるための工化時報復刊1号を発行した。内容は、会則、経過報告、役員名、評議員名よりなり、会員全員に配布した。

つづいて第2号の編集に入り、時報としては、準備号、第1号を経て初めて本来の“親睦的な内容”の会誌の発行となつたのである。

この間、数度にわたる委員会、打合せ会が開かれたのは云うまでもない。

資金が思うにまかせず、又編集委員の無能力も手伝つて、会員諸兄に満足いただける時報を発行出来なかつた事は遺憾であるが、今後は専心努力、より良い内容の時報を発行する予定である。

〔 会 員 消 息 〕



級会だより

○ 二化会だより (旧制学部第二回)

昭和23年戦后いち早く復活して「二化会報」も創刊されたが、一時途断えて3年再び復刊現在まで10号を数えるようになった。全く学友の親睦機関紙ですが全国に散らばった人達からは懐しがられています。現在の役員は次の人々です。

会 長	西岡正光	東亜化工(株)専務取締役
常任幹事	石尾正道	東京通産局繊維化学局
	神山文男	神山設計測量事務所
	倉田 貢	倉田高級耐火物製造所
	竹内俊夫	トヨタ自動車販売(株)東京事務所サービス課長
	古谷喜一郎	日本石油(株)製油部計画課品質管理係長
会計幹事	松縄好平	ブリヂストンタイヤ(株)購買部
幹 事	石田公茂	タマポリ(株)社長室
	市川 勤	日本石油精製(株)室蘭製油所計画課長
	稲垣達雄	安全油脂(株)
	小菌雅司	みたまや金属(株)取締役工場長
	笹岡棋人	斎藤工業(株)第2生産部長
	高橋文雄	東京都世田谷区農業委員
	名取 康	三共(株)購買部第1課長
	南本久雄	東邦油脂(株)取締役業務部長
	松岡忠太郎	松岡商店(塗料工業薬品)
	松原敏夫	浪速工業(株)専務取締役
	森本 久	東西写真工業(株)代表取締役

年二回定期的に会合を持ち、また遠方より学友が上京したり或は転勤したりで集つて旧交を温めています。昨年次の人々が技術士になりました。

化学部門(合成樹脂)	佐藤芳雄	(株)オルガノ商会
〃 (ゴ ム)	西岡正光	東亜化工株式会社
生産管理部門(品質管理)	名取 康	三共株式会社

二化会は工業化学科卒業生の横のつながりの一つであり、工化会は縦のつながりと考えていますので、各回の卒業生の方

や学生諸君からの呼びかけを大いに希望しています。工化会が大いに発展し「工化時報」が永続して行くことを期待して止みません。

名 取 記

○ 旧制学部才 11回

我々も母校を卒業して新たな希望と憧憬とをもつて社会に門出して早くも十年近くの歳月を送らんとしている。

幼少の頃時折“十年ひと昔”と云う諺を耳にしたが、現今の科学技術のめざましい進歩発展にはもう遠い過去の言葉にしか考えられない。一昨年10月、人工衛星第1号の打上げに成功して以来、今年になつて月ロケット、宇宙ステーションの打上に成功して居り、現在の原子力時代は遂に未知の力を秘めた月世界をも究めんとし、時間の経過と共に刻一刻と可能性の発見と実現は絶え間なく飛躍して行きつゝある。この様な激しい変遷の中で、クラスの人達は学園で培かれた日大スピリット及び実力と経験とを遺憾なく發揮して多方面に亘り夫々の分野で大なり少なり中堅幹部として活躍して居られる事は実に喜ばしい事である。

卒業後クラス会も小島、山村両君の世話により3、4回行はれ、その後昭和33年4月より平井、芝宮が世話人を引継ぎ、次期クラス会も明年春頃に予定して居る。その他、地域的なグループ会合、学生時代の卒論研究室単位の会合等もひんばんに行はれている。

又昭和31年発行の「卒業生名簿」以降に勤務先を変更した諸兄を報告すると、

池田幸治君	三洋貿易株式会社
大木信次君	日本精工株式会社藤沢工場
小野寺博君	高輪電機製作所
木田静男君	自 営
刺賀文太君	高野農産工業株式会社
高橋昭敏君	日本大学理工学部工業化学科横手教授研究室
田中幸穂君	目白学院高等学校
中小原喜典君	日本レジン株式会社
永森礼介君	明昭工業株式会社

本 間 豊 穂 君 防衛庁(自衛隊)
村 木 良之介 君 大機ゴム工業株式会社
山 村 喜三雄 君 永峰化成工業株式会社
脇 龍之亮 君 三惠化学株式会社
樋 渡 正 君 は稲垣正君に改め。

尚住所変更等詳細な事は、近く工業化学科卒業生、在校生の職業別名簿が発行される故御参照下され度し。

(芝宮記)

○ 新制学部才2回

昭和34年7月13日、天久にて第2回クラス会を行いました。出席者は、宮尾、森、夏堀、新谷、三輪、斎藤、下東、仁礼、村松、の諸氏であり、会の決定事項は、クラス会委員補助は来年度より2人とし、取敢えず三輪、夏堀両氏にお頼みする事になりました。又クラス各員の連絡は、宮尾、細谷の両者が行う事に致しました。

会は、終始なごやかに行なはれ、お互ひの健康を祝し合い、自分達の仕事の内容、友人達の近状を語り合い、楽しく夏の一夜をのみ、歌い、食つて過ごし、次回は更に盛大に行う事を約束して会散致しました。

又細谷が今年度は、クラス会世話人として微力を尽すことと成っておりますから、クラス員の近況が知れておりましたら、どしどしと連絡して下さい。

連絡先 東京都世田谷区 若林町294 細谷昇

細 谷 記

個人だより

養命酒製造KK第二工場

栗 林 正 雄

(短期一部 3回生)

田舎にとじこもつた関係か同窓会の皆さんには勿論級友とも会う機会が少く、従つて皆さんの消息も余りわからず、年1回か2年に1回のクラス会でやつと一部のクラスの者と連絡がつく状態であります。

色々同窓の皆さんと連絡の機会をつくりたいものと思つていましたが、お互の専門が同じである化学会が誕生したことは誠に結構な事と喜んで居ります。工化時報の内容も始めてよく解かりませんが思いの尽に投稿させて頂く事をうれしく思います。諏訪湖のほとりの岡谷に来て万5年となりましたが生れが道産子（北海道産）であるのでこの辺では大変寒い所ではありますが、それ程寒いと感じないまま過して来ました。この辺は四季を通じての観光地で温泉と山に恵まれ空気もよく、住めば都と山の中も満足している今日この頃ですが月に1～2回社用で上京しては田舎者の感を味わつて帰ります。たまには恩師の御気兼ね伺いと思つても用時を済ませれば夕方になつたり日曜日であつたりで御無沙汰ばかりして気にとめて居ります。

今後定期刊行誌の「工化時報」によつて同窓の皆様の様子も知り亦、知識の交換の機会もつくれる様になることを期待して居ります。またこの「工化時報」が将来工化会の行事や研究発表等の機会を与える雑誌まで発展する様な方法も如何かと思ひます。

最後に勤務先と住所を書かせて頂き今後の御指導御鞭撻を賜り度いと存じます。勤務先は岡谷駅よりバスで5～6分の所に養命酒製造KK第二工場があります。住所は岡谷市川岸1960番地です。同窓のどなたでも御来岡の折は是非御来場下さい。御待ちして居ります。

（新学部6回生、東海林正氏より次のようなお便りがありました。）

拝 啓

「工化時報」の原稿の依頼を受けましたが、不本意乍ら今度は御勘弁願ひたいと思ひます。

小生6月よりセメント町に移転しておりますので、順真寮から転送されたのではありますが、残念乍ら13日でした。それ故原稿締切日までには間に合いません。何卒悪しからず御諒承願ひます。次の機会にでも駄文を送らせて頂きたいと思ひます。

学舎を離れて早やくも2ヶ年半となりました。振出しは小野田工場試験課にて無我夢中で2ヶ年を過ごしましたが去る6月

より中央研究所へ派遣され第一課にて改良法に就いての基礎的研究に従事しております。(テーマ、改良法に於けるクリンカの適正焼成温度並びに焼成時間に及ぼすクリンカ化学成分及び原料の種類の影響について。)当法は熱経済と焼出量の増大を狙ったものであり、既に三工場にて採用されておりますので、その結果を急ぎ、比較的多忙の日々ではありますが試練の好機と考え張切つてやっています。

「工化会」「工化時報」兩名は初めて見ました。甚だ勝手ですが第2刊ができましたら是非お送り下されたくお願い致します。

草々

東海林 正

○ 田所利夫氏のこと

高工3回卒の田所利夫氏は永らく三樂酒造川崎工場の工場次長として後輩の先頭に立つて活躍されていたが、今春札幌工場新設にともない工場長と栄転され渡道された。田所氏は工科校友会役員として、また工化会副会長として尽力されてきたが、栄転とはいえ東京を離れられることは一末の淋しさがある。今後は北海道地区の同窓生のため大いに御活躍されることを期待したいものである。

○ 吉野俊雄氏のこと

専工1回の吉野俊雄氏は大阪市立工業研究所において鋭意研究に従事されてきたが本年薬学博士のタイトルを授けられ、尚一層研究に励んでいられる。我が会員も年々増加の一途をたどるわけであるが工学、理学、医学、薬学等の各分野で既に数名がタイトルを得られている。現在論文提出中の者も2,3あると聞いているが工化会発展のため誠に喜ばしい次第である。

旧制学部6回生

杉山忠次氏

昨年末ロンドンのシェル石油本社に勤務されていたが本年3月帰朝、現在横浜の研究所。

星野益国氏

小西六写真工業(株)を退職し「セントラルカラーフィルム」の会社を自営された。

磯部 求氏 (アリミノ化学(株)勤務)

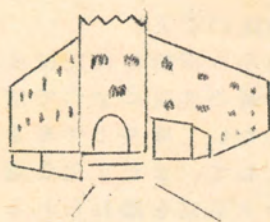
10月6日より社用にて世界一週の旅に立たれた。

斎藤喜久蔵氏 (大昭和製紙技術部長)

10月14日社用で米国に出張。

笠井 記

母校だより



市川良正教授外遊

市川良正教授は、アメリカにおける2部教育の実状、トレーニング用原子炉の実用状況及び欧米の石油事情等を視察するために昨年12月1日羽田空港を出発されアメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、イラン等を経由3カ月間にわたる視察を終えられて本年2月27日に、お元気にて無事帰国された。

出発されるに当たり昨年11月24日に油会会員約100名が山の上ホテルに集り、先生の壮行と健康を祝し記念品を贈呈しました。

最初アメリカに渡られた先生は、カリフォルニア大学、ワシントン大学、マサチューセッツ工業大学、ライス工業大学、ジョージワシントン大学、ノース・イェスターン大学、ブルツクリン大学等、多くの大学を訪問され、2部教育の実状について視察された。この内理工学部において2部教育を実施している大学は3校で、南カリフォルニア大学は、大学院院長のクロイチエル博士、ノースイェスターン大学では工学部長マツカーベ

教授等と意見の交換、その実状をきかれ、又夜間部の講義を見られる等つぶさは視察された。(詳細は桜門3号に)

次いで石油事情についてアメリカではカルフォルニヤスタンダード石油会社、リッチフィールド石油会社等の各製油所を、更にイランではイラニヤン石油会社の、世界第一のアバダン製油所等の工場を見学され(詳細は“アスファルト”誌2巻8号に)所期の目的を達せられて恙なく帰国された。

油 会 幹 事

松本太郎教授(工業化学科第1回生)国際会議出席の為渡欧

松本太郎教授はオーストリアのグラーツで開催された油脂化学国際会議(9月1日~9月5日)に出席の為去る8月24日に羽田を出発され、この10月24日に無事帰国された。

出席に先立ち去る8月8日工業化学科卒業生有志約100名が集り、山の上ホテルにおいて先輩の壮途を祝し記念品を贈呈した。

8月24日羽田を立たれた松本太郎教授は途中印度・イタリアおよびスイスに立寄られ、その地の大学・研究所を訪問し、グラーツでの国際会議においては学術講演(植物油中のフェノール性物質について)をされた。会議後東西両ドイツ・スエーデン・デンマーク・オランダ・フランス・イギリスの順に欧州各国の大学および研究所を訪問されて空路アメリカに渡られた。アメリカにおいてはエール大学(Bergmann教授)・イリノイ大学(Kummerow教授)・バンクーバーの水産研究所(Idler博士)など多くの大学・研究所を訪問されてロスアンゼルスからホノルル経由の日航機で無事帰国された。

岡 俊平教授

昭和24年より電気化学の講座を持たれて来た岡俊平先生は今春東京大学を停年退職されると同時に本学専任教授として着任された。御承知のように岡教授は電気化学、製塩工学の分野では勿論一般化学界並びに化学工業界に対する功績は誠に大なるものがあり本学発展のため工化会としても大いに歓迎の意を表したい。

大木 喬 氏(旧制学部4回)

工業経営科の講師としてこの4月から来ていただいている。主として実験の指導に当たっているが当分の間毎週土曜日に工業化学科の実験室を借用して工経の学生指導に当たっている。

創立70年式典行わる

日本大学は昭和34年10月4日をもつて創立70年を迎えた。記念式典は6日午前10時から両国日大講堂に天皇、皇后両陛下をお迎えして、岩首相、田中最高裁長官、松田文相、大浜早大総長など来賓1,500人、校友1,500人、学生代表2,000人の参列のもとに行われた。東京フィルハーモニー交響楽団の演奏のもとに式典は開会され、各代表の祝辞ののち天皇陛下より次のお言葉があつた。「日本大学が過去70年にわたり、幾多の人材を育成し、国家社会の発展に貢献してきたことは、私の深く多とするところであります。今後、さらに一致協力して学園の充実をはかり、ますます文化の向上に寄与し、その使命達成に努力することを希望します。」この後、呉総裁の発声で両陛下の万才三唱があつて、10時45分式典は終了した。また式典は全国にテレビ中継された。

35年度就職状況について

工化科 就 職 係

例年通り求人会社は大中小企業にわたっている。主として中小企業が多く、特に取上げられるような事はないがあえて挙げれば昨年と比較して出足が速やかかつたことである。そこで夏期休暇中及び九月中にはすでに内定者が相当数出た。しかし此の事は多く各会社が協定を破り10月の試験が形式的となつてしまつているためである。このため学生の間にも例年になくあせりの色が見えると云つた状況で、学業に身が入らない様子が多々見られる。現在就職先の決まつて居る学生数は 名で就職先としては日本石油、三菱造船、宇部興産、小野田セメント、横浜精糖、八咫電気、日本ライヒホールド、久保孝ペイント、鉄興社等の製造会社又商事会社としては安宅産業、兼松等があり職域も広範囲に亘つている。求人会社数は10月10日現在で約300社で3月迄には2~3割増加の見込となるようだ。

しかし本年度は11月頃に一応の求人が終るのではないかと思われ、此の時期を逃がせば就職ができない程一時にどつと求人が来ておりその結果かなり自由に会社を選ぶ事が出来ると同時に試験日がぶつかつたり、小企業会社への希望がなかつたりして相当多くの会社に受験生がなく、この時期にあぶれるものも出ると思われる。以上が本年度の特色だがこれに対処するためには早くから会社の研究を行い春、夏期の休暇には実習により多くの学生を送る必要がある。又学生も会社の選択に際してそれぞれ相当の実力及び性格にマッチした会社に受験される事が望まれる。勿論教室としても総出で就職の開拓に進まなければならないことは当然であらう。

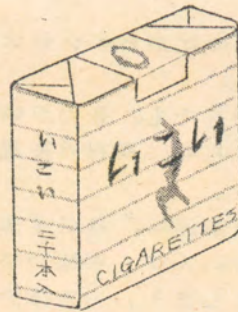
最後に各会社に於ても実際入社試験を統一した時期に行つて貰いたい事は勿論であるのだが、なお今後共、先輩よりの積極的な協力をお願い致します。

工化会学生会員の活躍

読書の秋、味覚の秋等、色々古来より云われていますがよい季節となりました。先輩諸兄におきましては、各分野で御活躍、御発展の事と存じます。我々学生も、勉学に、又恒例の工学祭の準備等、一年の内で最も楽しく、そして忙がしい季節をすごしております。工化会が発足しまして以来一年になりましたが、この一年学生会員がしました事は、春教養課程を終了し、専門課程に移行してきました新入会員を迎えて、3、4年と合同に小河内ダム迄、新緑の奥多摩溪谷を尋ね、バス車中にて親睦をはかりました事、又夏季休暇中を利用して、工場実習に多数の学生会員が行きました事などが学生会員がしました大きな事と云えます。この外に表面には現われませんが工化会にとりまして重要な事業であります名簿編集に、10名内外の学生が加わり、予定よりは少し遅れましたが発行する迄に到りました事、又、その他としましては、学生相互の親睦をはかる迄にはいつていませんが、工化会関係の学生役員、(1部、2部、短期)が集まりまして相談会を持ちました事などです。最もこの相談会以後まだ具体的には何も行っておりませんが。今後の行事、その他として具体的に計画されています事は工学祭に従来通り、各研究会が研究発表をします外に、現在工業化

学科に在ります化学関係器機の展示並びにその操作を学生でもつて行いたいと学生幹事会が中心となつて、この計画を推進している次第です。現在の所は以上の様な状態ですが、今後も学生の手で色々な事を行うと思ひますが、その都度工化時報に発表して行きたいと存じます。

いこいの場



中原先生のこと

市川次良

「いやあ！ 御元気ですねえ、とてもそんなお年とは見えませんねえ。我々若い者にもこの登りは随分きついのに！」

今では17号台風が無残に荒廃させてしまつた山梨県荒川の上流、西山温泉の奥奈良田部落から南アルプス北岳に向う従歩路がある。途中急流の河原で休息中の若い登山者が感心した顔で眺めて居る。にこやかに笑い乍ら一服して居る老登山家はたしかに若く見える。

中原先生の夏休中のひと時である。先生は工化科主任教授として御多忙な学者・技術者である半面、日本山岳会々員として自身山登りをされ、自然の風物に接し、若い人達に自然を愛しそれに親しむべき事を示して居られる。

古い卒業生諸兄は、かつて若かりし頃の先生の思い出が残つて居られ、最近の先生の姿が想像し難い点もあるかと思われるが、どうしてどうして、先生は未だ未だ御若い。老人特有の肥りもみられず引締つた長身、眼鏡越しに光るやさしい落付いた眼差し、山頂の岩をしつかりと踏みしめて、日本第2の高峰から四囲の山々を望んでおられる先生の勇姿を想像していただき度い。

この夏からでも先生は、南ア白根三山従歩、東北地方の山八峰踏破、奥多摩海沢溪谷溯行と壮者顔負けの山行をなされ、東北の山々の如きは殆ど1日1峰と言うスピードで登られているのである。私などの同行した時等、3日間連続10数時間平均の急な登り降り皆あごを出して参つている際、翌日はけろりとして、「大体君達の3分の1か半分しか食べないね、それで

も何とか保つただからエンジンの性能が良いんだね。」等と笑つて居られる。

先日の海沢行でも、先生が学生諸君に負けない程元気で歩かれるのを目撃して、同行の玉置先生始め一同感心して了つてゐる有様である。

ゲートの座右銘に、「急がず休まず」という言葉がある。大抵登山経験の少ない人は、平地で早くエネルギーを使いすぎ、登り道でへばつてしまふ。一方体力・脚力に自信のない組は殊更ゆつくり歩かぬ為、かえつて疲れ過ぎ所定の目的地迄達しない事が多い。そこへ行くと先生は御自分のペースで一歩一歩慎重に歩行され、豊富な経験で他の人々のペースと御自分のそれとを見事に調和させられる。それ故先生の登山には少しも無理が伴わない。

血気にはやる事もなく無駄な尻込みもないのだから、若気になり勝ちな遭難等は起り得べくもない。若い学生諸君には先生と一度山行を共にして学ばれることは何よりの体験となる事と思ふ。

これは亦そのまま処生の態度として重要な事であつて、先生が近来、益々盛んに学会に研究に立派な業績を挙げて居られる原動力の秘密は恐らく此の辺にあるものと信じてゐる。

我々後進としては、先生に今後益々御健康で御活躍される事を希望すると共に、学窓を去つた先輩諸兄にも御元気な先生の一面を御伝えして御安心を願いたいものである。

名簿編集子泣かせの姓名


編集委員 A. U.

誰でもよめる漢字でも、その組合せによつてまことに読みづらいものとなる。編集作業中よみ難い姓には全く悩まされた。五月女、手代木、天埜、計野、数見などはまだ読み易い部類、渡世、参木、須恵、法喜、坂廻辺、猪鼻、座親、御射山、色摩などにいたつては何と読めばよいのだろう。いまだに読めないのが幾つかある。名の方でも同じように読み難いのがいろいろあつた。直礎、巍、孜、岑生、郷見、鉦章、右穂、孟虎、棋人、所毅、偉暢など整脱におよんではがく然とする。古い卒業生の中には正義、忠義、孝行などの愛国型忠孝はないかと探してみ

たが見当らずその代り義孝があつた。政界型の芦田均は最近の卒業生、吉田茂、片山哲があつたら面白いところ。神田明人となると宗教型。ついついづら気をだして“はだか随筆”の中の“佐藤須藤犬のくそ”の反対説——をしらべたところ鈴木が一番多く佐藤弘人の説は実証された。先祖代々の姓や親からもらつた名にケチをつける気は毛頭ないのだが姓名の誤読はたちどころに氏名索引での迷子を生ずるから事重大だ。とにかく編集子泣かせの姓名は神経質になりがちなしかも極めて単調な名簿編集作業中編集子の唯一のなくさめだつた。まことにもつて感謝する次第である。

東京ガス 豊洲工場の実習を終えて

学部3年 伊 東 政 幸

いつもの例だが工場に入つてまず我々を迎えるのは寄怪な種々の設備である。そして彼等を単純な気持ちでながめるのである。彼等は誰がこようと他で何が起ろうともひとときの休みもなくもくもくと働らいている。この無愛相な連中にも1ヶ月の期間はいくらかの親しみを私に与えた。ところで工場にきてまず与えられた課題はガスの低圧精製装置の能力試験とも云うべきもので各装置に於る「入」と「出」のガス中の不純物 (NH_3 , SO_2 ) とガス液、排水、タールを定量的に分析するのである。単純な操作ではあつたがなかなか予想通りの結果が表われない。例えば NH_3 の定量では微量の NH_3 を含んだガスを硫酸溶液に通し NH_3 を吸収させ濃度の減少を見るのであるが結果は逆に増加していたり、又 SO_2 の時でも装置を通つて洗われたはずのガスが「入」より「出」の方が量が多い場合が出て、何度もやりなおした。しかしこれらの実験を通し得られたものは結果ばかりでなく、じかにこれらの装置に接し内部の構造や状態の細かい所迄観察出来た事である。同じ工程のガスでも圧が違い臭が違い温度が違ふ。白いビニール管で採取すると直ちに黄色から茶に変る。これらについて心ゆくまで質問出来た。そしてこの工場では原料の石炭、重油からとれる副産物はすべて製品化させているので種々の工場が中に入り、これらの事についてもくわしく見せてもらえた。工場の大体の実態がつかめると云うのも収獲の一つである。

「学術的交流を期して」

学部3年 畔上 統雄

工学祭が今日の様に学内を一般に解放して開かれる様になつてからの歴史は周知のごとく、今だ極めて浅いのだが、自らの手でこの行事を推し進めて来られた先輩の脳裏にはきつと“学生の手で行う事だから大した成果は期待出来ない。”と云う御記憶があるにちがいない。たしかに今日に於ても学生の力に限界のある事は同様であるが、今回の工学祭を進めて来た誰れもがいただいた念願と云へばこの限界をわずかでも克服しようと云う事であつた。

具体的に述べれば次の点で今回の工学祭は特徴がある。まず11の研究會を“高分子化学”と云うテーマの下に統一し分散した力の集中に努めた事及び展示のうちに研究室の装置を適所に配置してその内容的充實を計つた事があげられる。又従来なかつた「特別展示」として、器械分析装置展(赤外線吸収装置、etc.)、を同時に開き工学祭の社会的な意味を考慮した。学術講演會も将来の日大工業化学科に於ける研究室、先輩、学生の学術的交流の場に發展する事を期待しつつ新しく企画した次第である。

以上の様に工学祭を企画実行しながら、先輩と学科との学術的交流は勿論、全体的結びつきも極めて薄い事を残念に感じた。それにつけても、期待したいのは、初声を上げたばかりの工化會が更に更に生長して行つてくれる事である。まずその手始めに、私達はこの工学祭を御覧になつた先輩諸氏に明日の糧になる御批判を乞いたい。

「社会人一年生の繰り言」

森 高(新制1部 8回生)

去る10月15日に久振りで母校の門を潜つたが、その時に穴沢助教授から何か工化時報の為に原稿を書いてくれとの依頼を受けてしまつた。元來原稿と称するものを書くのは余り得意でもないし又好きでもないが、“社会人1年生”とでも云う様な事で気付いた事でも列挙してみる事にする。

花香る3月希望に胸を脹らませて桜門を巢立つてもう7ヵ月

にならんとしている。振り返つてみるに4月に今の職場に入り、3ヵ月もの長期間に渡つて学校教育と同じ座学と工場実習とを中心として事業内容などを詰め込まれた。学校でも良く見る風景であつたが、講義中船をこぐものが続出と云つた所で学校時代と大差は無い様であつた。7月に入つて配属先が決定し、小生の場合、技術研究所化学研究室であつたので、大学の研究室と大差は余り無いが商売に直結していることが頭痛の種と云う所である。少々心細い気もしたが、小生の場合比較的恵まれている点が多く有りヤレヤレと云う所である。がしかし日増に自分の浅学を痛切に感じる事が出て来た。次に感じた事や気付いた事でも列挙する。

- (1) 化学器機類の操作を殆どと云つて良い位に知らない事。
- (2) 実験計画を立てるに当つても学校に於てはランダムに実験を行う場合が多かつたし、現在もその傾向が有る様に思う。会社と学校とでは事情も異なると思うが、第1に能率的な実験を行つていなかつた事に気付く。そこで如何に少ない実験回数で最大の収穫を得ぬかと云う事になつてくるが、そこに登場して来るのが推計学であり統計学である。これらの知識を持つてないと困る事が多い。
- (3) 学卒たる者は語学(特に英語)に屈する様では話にならないと云う事。独語も或る程度楽に訳せぬと困る事が多々有る。しかも英語の場合特にそうだが、迅速正確で且つ、旨くそれをまとめる力を養つて置く必要が有る。日大の場合、専門ではあまり負けないが語学で他校に負けると云われているが、そんな汚名は早く追放したいものである。
- (4) 学生時代に出来るだけチャンスを捕えて工場見学や工場実習をしたりして置くと有利な点が多々ある事。
- (5) 学卒であるとう云うプライドを持つ事は大切であるが、必して鼻にかけるなと云う事である。必ずやその反動が目に見えて現われて来る。確かに理論面では少々ばかり知つているかもしれないが、経験的には非常な差が有る事を知り、良い意味で利用(?)して少しでも自分の仕事にプラスになる様にせねばならぬと云う事。
- (6) 学校時代に出来るだけ多くの、心から打ち明けて相談出来る先生や友人を作つておく事。

いろいろと便利な事が多いし、会社の友人と云うものには或る程度の限界が有る様に思う。

- (7) 小生達はどちらかという自分の専門ばかり捕われて広い目で物を見る習慣が出来ていないがそれでは駄目であるとする事。即ち広い視野で物を見る事が必要なのである。
- (8) “専門ではないから、そんな事知りません”というのではだんだんすまなくなつて来ていると云う事。例えば化学屋でも一寸した電氣的な知識を知っていないと困る事が多い。この点では小生も悩まされる事が多々有る。
- (9) 自分の不勉強を余り簡単に暴露しなさんなと云う事。例えば工員さんに何か質問された場合、良く知らなかつたり、少々自信が無くても、自分の考えている事で一応返答して置き、もしも調べて間違いであつたら次の日でも間違つたとは云わず“こういうふう考えた方が良いですよ。”とでも云つて訂正する位の心算と要領が必要な場合も有ると云う事。
(少々ズルイのかな?)
- (10) 職場を決定する場合、大会社ばかりが能ではないと云う事。大会社にはそれなりの悩みが有り苦勞があるからである。
- (11) 化学工學的な知識が非常に要求される事が多いという事。
- (12) 度々云われている事であるが要するにヒューマン・リレーションが非常に大切だという事。現場では切実に感ずる事であるが、如何に工員さん達を旨く使い注目を集めさせるかという事で、この事がその人の運命を決し兼ねないとする事である。
- (13) 立身出世に執心するなと云う事。近頃立身出世は競争の如し、と云う事が云われているが、前には頭を低く、後にはペダルを踏む如く蹴りとばせと云う事らしいが、そんな事は一時は良いかもしれないが長続きしないと思う。第一馬鹿氣でいる。

最後に月並な事であるが健康で丈夫な身体でありたいという事である。一寸の間に世間が分つた様な書き方をしたが、小生として悩まされる点が多々有る。それもすべて努力と時間が解決してくれるものと信じている。つまりぬ事をゴテゴテ書いたが来春卒業をされる諸兄や在学諸兄の方々に少しでも参考になる点があれば幸と云うものである。本年度の就職は良いとの事、先輩とし

てうれしく思っている。がその原因は本年度の人達には優秀な人材が多かつた事は勿論であるが、景気の上昇と云う他の大きな因子が有る事は否定出来ないと思う。問題は実力が有れば良いのである。

“学生時代お前はどうかつた！”と云われると弱いが、麻雀や囲碁にウツツをぬかさず勉強して広い知識を得て置けば後に後悔する事もないし、必ず勉強した効果を発揮する時が有ると思う。社会に出てからも山や旅行に行く機会はいくらか有ると思う。事実小生も長くはないが1カ月に1度、山に行く事に行っているが現在着実に実行している。要するに世間の風はそう甘いものではないと云う事になる。頑張れ諸兄！
生意気を云つてオツト失礼！

レポ — ト

石油化学工業の現状について

新制1部1回生

1. 経緯

1920年米国において石油精製廃ガスを原料として始つた石油化学工業は、世界的に長足の進歩を遂げ化学工業に大きな分野を占めるに至つた。

わが国においては、昭和30年頃より石油精製設備の規模の拡大と高度化（接触分解装置、接触改質装置の設置等）が行われ、石油精製廃ガスを有効に利用して経済的に化学製品を製造し得る基盤が漸次整えられてきた。他方これと時期を同じくして合成繊維、合成樹脂等の需要が急激に増大してきたので、これ等の原材料を供給すること。従来全量輸入に依存し、逐年輸入の増加しつつある石油化学製品を国産化することにより、その輸入を防退すること。石油化学を企業化することにより主要化学工業の原材料の供給価格を国際水準まで引下げること。

以上の諸点を考慮し、化学工業および関連産業の国際競争力増大を目的として企業計画が立てられた。

2. 石油化学第1期計画

石油化学の企業化に当つては需給上の緊急性および既存産業との競合度合を考慮し、エチレン系、芳香族系、アルコール

ル・ケトン系製品に目標をおき第1表のような計画のもとに順次着手していった。昭和32年3月に丸善石油下津製油所の第2級ブタノール・メチルエチルケトン製造設備が完成したのを始めとして、わが国石油化学工業の企業化は順調に進行し34年末までには殆んどの設備が完成することになる。これを第1期計画と称している。

3. 第1期計画の設備資金

第1期計画の製品別生産能力および所要資金は第2表の通りである。

4. 第2期計画の方向

第1期計画に基き石油化学製品輸入防遏による経済的効果について考えてみると、国産品の市場への出廻りに伴つて、輸入品は逐次順調に国産品に置き換えられ所期の効果を挙げつつある。しかし32年度33年度における生産、輸入の実績をみると第3表の通りであり、高圧法ポリエチレン、ポリスチレン・エチレングリコール等は国産品の出廻りに拘らず需要が急伸しているため輸入は依然増加の趨勢にあり、第1期計画の規模では既に不足が見込まれている。

現在総合石油化学を目標としている3社（三井石油化学、三菱油化、日本石油化学）は、三井石油化学を除きとりあえずエチレンのみを利用しており、他の成分は自家燃料に利用しているに過ぎない。これは石油化学製品に対する需要偏重から、プロピレン系、ブチレン系の製品需要が経済単位に満たなかつたためである。最近に至りこれら製品についての需要も漸次増加し、工業単位として採り上げられうる段階に至つたため、既存石油化学工業の合理化の意味からこれらの生産が具体的に考えられてきた。代表的なものは、アルキルベンゾール、ポリプロピレン、プロピレングリコール、四エチル鉛等である。更に既存産業を石油化学式によればコストの引下げが可能であるもののうち、現状を考慮して切替可能なもの、即ちアセチレン、ブタノール、オクタノール、アクリルニトリル等がある。また第1期計画で企業化された製品のうち、その後需要が増大し生産能力が不足を来し設備拡充を急がれているもの、即ちポリエチレン、エチレングリコール、テレフタル酸素がある。

以上の点を考慮し第2期計画に関して、現在通産省において需要見透し、内外製造方式の比較、生産規模等について検討を行つており、緊急を要するものから担当企業を近いうちに選別決定することとなつている。

才 1 表 石油化学才 1 期計画

(単位トン)

会社名	技術提携相手	製 品	生産計画	生産開始の時期
丸 善 石 油	ケミカルプロジェクト	第二級ブタノール メチルエチルケトン	2,400	3 2 年 4 月
	U. O. P	ペンゾール トルオール	1,850 6,240	
		サイエンティフィックデザイン	キシロール テレフタール酸	6,000 9,600 7,500
日 本 石 油 化 学	ストアンドウエブスター	イソプロパノール アセトン エチレン ブタジエン	4,000 4,500 35,000 5,150	3 2 年 5 月 3 4 年 5 月
昭 和 油 化	ファイツプス(ブラウン)	ポリエチレン	10,000	3 4 年 7 月
古 河 化 学	スタンダードオイルインデ イアナ(プロノックス)	ポリエチレン	9,000	3 4 年 6 月
日 本 セ ー ン	グッドリツチケケミカル	G. R. S 高スチレンゴム G. R. N	5,800 1,200 1,500	3 4 年 6 月
三 菱 石 油	U. O. P	ペンゾール トルオール キシロール	4,700 3,500 3,000	3 3 年 2 月
住 友 化 学	I. C. I ストーンアンドウエブスター	ポリエチレン (エチレン)	11,000 (12,000)	3 3 年 4 月

会社名	技術提携相手	製 品	生産計画	生産開始の時期
三井石油化学	ストーンアンド・ウエブスター チグラー	(エチレン)	(20,000)	33年3月
	サイエンスステイフイツク デザイン	ポリエチレン	12,000	" "
	サイエンティフイツクデザイン・ ディスタラーズ	エチレンオキサイド	2,400	" "
	ストーンアンドウエブスター	エチレングリコール	4,800	33年6月
	U. O. P	フェノール	12,000	" "
三菱油化	サイエンスステイフイツク・デザイン	アセトン	6,840	33年3月
	ストーンアンドウエブスター	ベンゾール	8,760	" "
	B. A. S. F	トルオール	11,220	" "
	B. P. M	キシロール	11,220	" "
	サイエンティフイツクデザイン	テレフタール酸	12,000	33年10月
日本合成ゴム	ストーンアンドウエブスター	(エチレン)	(22,000)	} 34年4月
	B. A. S. F	ポリエチレン	10,000	
	B. P. M	スチレンモノマー	18,000	} 34年10月
	サイエンティフイツクデザイン	エチレンオキサイド	2,700	
		エチレングリコール	3,000	
旭 ダ ウ	フードリー, エソソリサーチ アンド, エンジニアリング, ザ グッドイヤー(プロノックス)	G. R. S	45,000	35年1月
	ダウケミカル	スチレンモノマー	18,000	34年10月
日本触媒	自 社 技 術	ポリスチレン	10,000	32年4月
	モンサントケミカル	エチレンオキサイド	1,800	34年5月
三菱モンサント	モンサントケミカル	エチレングリコール	3,840	} 32年4月
		ポリスチレン	7,200	

※ 34年12月末より能力は2倍になる。

才 2 表 才 1 期計画の製品別生産能力及び所要資金

品 名	生産能力 (屯/年)	所要資金 (百万円)	技 術 料 関 係 (千ドル)	輸 入 機 器 関 係 (千ドル)	所 要 外 貨 総 額 (千ドル)
エチレン	89,000	12,244	2,927	6,132	9,059
ポリエチレン	52,000	22,790	12,737	7,679	20,416
エチレンオキサイド	6,900	3,244	} 1,269	} 1,230	} 2,499
エチレングリコール	11,640	1,789			
スチレンモノマー	36,000	3,957	2,626	495	3,121
ポリスチレン	14,100	1,218			
ベンゾール	19,700	} 9,223	} 699	} 1,045	} 1,744
トルオール	20,700				
キシロール	23,800				
イプロパノール	4,000	2,395	} 2,499	} 651	} 3,150
フェノール	12,000	} 3,698			
アセトン	11,340				
合成ゴム	53,500	17,411	6,587	4,312	10,899
テレフタル酸	8,200	4,094	5,596 [*]	1,010	6,606
合 計		82,063	34,940	22,554	57,494

(注) (1) 技術料には特許料、設計料、技術指導料、技師招聘
費用を含む。

(2) * テレフタル酸の金額にはバラキシレン、イソ
フタル酸等も含む。

(3) 期間は、昭和30年から34年までの5ケ年間。

表3 石油化学製品生産輸入実績表

(単位トン)

品目名	3 2 年 度			3 3 年 度		
	上	下	計	上	下	計
ポリエチレン	生産	—	—	6,234	84 82	14,716
	輸入	8,890	10,450	19,430	10,666	11,255
	計	8,890	10,450	19,430	16,900	19,738
ポリスチレン	生産	3,198	3,032	6,230	5,000	5,836
	輸入	3,240	920	4,160	1,605	1,961
	計	6,438	3,952	10,390	6,611	7,797
イソプロパノール	生産	301	993	1,294	706	1,467
	輸入	910	125	1,035	8	—
	計	1,211	1,118	2,329	714	1,467
エチレンジリコール	生産	—	—	—	1,246	2,271
	輸入	2,760	1,940	4,700	2,136	3,286
	計				3,382	5,557
プロピレンジリコール	生産	—	—	—	—	—
	輸入	870	750	1,620	1,308	1,679
	計					
アセトン	生産	3,363	3,389	6,752	4,092	5,017
	輸入	2,160	30	2,190	—	—
	計	5,523	3,419	8,942	4,092	5,017
メチルエチルケトン	生産	—	564	564	881	1,191
	輸入	840	330	1,170	51	—
	計	840	894	1,734	932	1,191
メチルイソブチルケトン	生産	—	—	—	—	—
	輸入	1,190	1,440	2,630	2,056	2,097
	計					
エチレンオキシド	生産	930	629	1,559	2,042	3,114
	輸入	450	422	872	262	—
	計	1,380	1,051	2,421	2,304	3,114
ベンゼール	生産	30,697	29,739	60,436	32,126	36,741
	輸入	—	2,220	2,220	933	—
	計	30,697	31,959	62,656	33,059	36,741
スチレンモノマー	生産	—	—	—	—	—
	計	5,450	3,544	8,994	5,395	9,267
合成ゴム	生産	—	—	—	—	—
	計	8,547	6,917	15,466	8,603	11,920

金の無いのは首の無いのと同じだそうだが、工化会に予算的裏付の無いことは、編集委員会に取つて、首はおろか手足まで取られたようなものである。いい会誌を出さないから会費が集まらない、予算が無いから良い会誌が出来ない、にわとりと卵の悪循環である。が、さすがは日大健児 N 科学の力と不屈の意志を武器として N とばかり専心努力、ここに工化時報第 2 号を刊行し得た事は喜びにたえない。乏しい予算なら、乏しいほど金の有難さはよくわかる。こんな有難い金を使うのだから、良いものを作ろうと張切るのも理の当然で、そまつながらも、会員諸兄に少しでも喜んでもらえる時報にしようとなつたつもりである。残念ながら初頭の計画に反し、内容は充分なものとは云えなかつたかもしれない。お気付の点はどしどしお知らせ願えれば幸いである。工化会も発足以来 2 年目を迎え今年こそ飛躍の年である。時報も 1 段 1 段とよりよい内容のものにして行かねばならない。しかしながら、基盤の未だ充分に確立していない工化会のことであるから成長期の悩みと云うか、前途には幾多の困難が横たわつている。我々はそれを乗り越えて行かねばならぬし、又その気概は充分に有るつもりである。会員諸兄の御協力を切にお願いするところである。末筆ながら、第 2 号発行に際し、御多忙の中を、原稿をおよせ下さつた会員諸兄、並びに編集に御協力下さつた方々に厚くお礼申し上げますと共に、実際に親睦的な内容になつたのは第 2 号が初めてのこととて編集にいたらぬ点が多かつたことをおわびする。

急 告

9 月末日配布予定の工化会々員名簿は、編集の事情により、工学祭当日、総会の席上で配布いたします。総会には多数の御出席をお願いします。上御了承願います。 名簿編集委員会

原稿募集

工化時報第 3 号は明年 3 月発行の予定です。皆様により親しんでいただくため、親睦的な内容の原稿を募集しております。消息、クラス会だより、個人投稿等どしどし千代田区神田駿河台 1ノ 5 日本大学理工学部工業化学科 工化会時報編集委員会まで、およせ下さい。

11.1日発行

